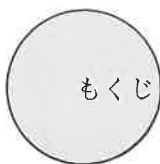




第6号
 編集発行／碧南市
 哲学たいけん村
 無我苑
 所在地／碧南市坂口町3-100
 〒447：TEL. 0566-41-8522
 ：FAX. 0566-41-7761



久野先生が語る「哲学的なたいけん」
 本の情報
 お知らせ
 エンカウンター・グループへのお誘い
 来村者の声



(兵庫 温泉寺 十一面観音立像)

「第6回瞑想回廊企画展示 8.5.1~8.6.30 開催」

当企画展示では、安藤佳香先生（中京女子大学）のご協力を得て、全国に残存する希少な霊木化現仏を写真パネルで紹介することができました。

安藤先生にはこれまで、に当苑の哲学講座を二度受け持っていたいただいたことがある。前年度の後期哲学講座ではメインテーマ「日本の『いろ』」から「仏教美術における金色と彩色」についてのご講義をいただき、受講者からは好意的な感想が多数集まった。たとえば、「京都へはよく行きますので、仏教文化、仏像の色から知ったことをもう一度見直してみたい」とか、「仏教美術で見過ごしていたことをいま一度改めて考えたい」など旅先での仏堂・仏閣巡りにまた一つ楽しみが増えたという喜びが伝わってくる。あなたは展示を鑑賞し、どんな発見をなさったのだろうか。

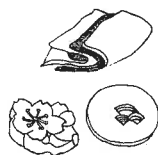
碧海キャッチネットワーク「この人とコーヒーブレイク」より

久野先生が語る

「哲学的なたいけん」

〈4月16日 インタビュー〉

「この人とコーヒーブレイク」は、碧海キャッチネットワークでお馴染みのトーク番組。今年5月、当村の顧問、久野昭先生との対談が、研修道場で取材された。録画ビデオは来苑者のリクエストにより、ハイビジョンギャラリーで午後5時まで随時上映されている。ご希望の方はお気軽に事務室まで。



哲学たいけん村無我苑というところは具体的にはどういう所なんですか。
久野 そうですね、そこが難しいところですね。

今私たちがこうしておしゃべりしているのも、外を歩いているのも「経験」なんです。

ある経験というものが心に深く残る。特別に思い出し、意味を考える場合がある。自分が生きていくうえで、それがどういう意味を持つのだろうか、そんな風に考えるような経験を「体験」と定義づ

けてきた、と思うんですね。そういう体験の中でも特に「哲学的な」体験をしやすいような道具立てを作るのが、私に課せられた仕事であろうと思うのです。

哲学的な意味を持つ、ということがどういうことであるか。当然経験とは違います。何かショックをうけて心に残るもの。そのショックが生きているという意味につながるショックであること。私たちは死をかかえて生きています。死と裏腹に生きている自分が、なぜ生きているか、そういう自分は一体なんであるのか、そういう意味に連なるような体験をしていただく。それをどう受けとめるかは、哲学たいけん村に来た人それぞれの、まあ変な言い方ですが（勝手）なのです。

たいけん村の構想

先生が哲学たいけん村を企画したコンセプトは、市民にいかに関連の深い体験をしていただくか、ということですね。

久野 結局ね、コンセプトを考えると

うことが私にとって、たいけん村オープンに漕ぎ着けるまでの最大の仕事だったわけですね。建物自体も設計者が全部違う。三人がそれぞれの建物を設計する。瞑想回廊は完全に西洋風の建物でしょ。研修道場は、まあガラスは別として日本風のかなり伝統的な建物。そしてお茶室だから設計者も違うし、建て方も違う。それぞれの建物に入ったお客さんの反応も違う。違ってらった時に日常の建物全体を回ってらった時に日常の自分のありかたとは違う、自分を発見できればいい。なぜそれを言うかというと、特に哲学的な体験、というのはどちらかというと非日常的な体験で、哲学たいけん村無我苑というのも非日常的な空間になっている。日常からスワックとはいりこめるにしても、やはり日常の空間とは違いますよ、というものを留意しないといけない。その空間に入っていたら、そこで何か経験していただき、それが体験、つまり哲学的な体験、であるというのが望ましい。これがたいけん村の企画を持ちかけられたときに、私が考えたことです。

「哲学的なたいけん」、がキーワードになってくるわけですね。

久野 そうですね。



瞑想回廊の意味

哲学的なたいけんの第一歩にこのたいけん村がなんらかの形で刺激をあたえるということですね。

久野 そうなんです。そこでどういう刺激を与えるかです。瞑想回廊というところは瞑想の部屋というのがありますけれども、特に展示もやっている。考えるということと見るということは、私は非常に絡むと考える。たとえば（意見）なんていう字は見る、という字を使う。見識、とか見解とかにも使われている。そして（見る）ということと（考える）ということとは非常に関連の深いことだから、いわゆる視覚的に目を通しての刺激がある。それなりに衝撃ということが引つ掻ききずを残すということがあれば



い。全部の人にそれを望まないですが、そういう展示をするというのが一つですね。これはかなり大きな意味を持つと思うのね。それからもう一つは研修道場の建物で哲学講座をやります。それは目と目より、耳から聴いて、考える。お茶室では、お茶を飲んでいただくだけでもいいんだけど、やはり、ゆったりとした気持ちになるということも必要であるし日本の思想の文化には、わりあいお茶が結びついているわけです。茶室の構造とか、作法だとか、伝統的なものから来て、これらも一つ手がかりになるんではないか。瞑想室にはイタリアのメデイチ家で瞑想に使っていた椅子があるんですが、それに腰掛けてぼんやりしていただいてもいいな、なんて思います。日常生活ではボケタンとする時が少ないわね。日本人の場合は(笑い)。そういう日常から一歩奥に入ってもらいために利用していただければいい。ただボケツとしてもらえればいいけど、あんまり沢山人が来て、ちよつと困る(笑い)。そこが難しい。

好きな言葉、あそぶ

最後に伺いますが、先生のお好きな言葉はなんですか。

久野 そうですね。他の人の言葉、つていうのは、私あんまり好きじゃないんでね。私はやはり、「あそぶ」っていう言葉が好きなんです。「あそぶ」、つていうよりは「あそばせる」、心をあそばせ

る、つていうのかな。あんまり固定した頑なな心でなしに、ゆったりした気持ちになりたいということなのかな。それは日常のせつちかちな面から離れたいという願望がまああるんじゃないかな。



本の情報

研修道場の立札茶席には、毎月、最新号の茶道雑誌二冊を置いてある。呈茶で一服の際、自由にご閲覧ください。

●(株)淡交社

茶道誌『淡交』

●河原書店

『茶道雑誌』

全国各地でのお茶会予定、または美しいグラビアで茶懐石、茶花、国宝級の茶道具などを紹介。

お茶の話題に限らず、心のやすらぎをテーマとした連載コラム、エッセイなど読み物としても盛り沢山。

フォト

「はじめての哲学講座」



前期哲学講座



歌舞伎のみかた講座



お知らせ

●第7回瞑想回廊企画展示
期間 平成9年1月5日(日)
3月2日(日)

全国各地のだるまを展示。展示に合わせ哲学的な機関誌ノータ7も発売。

●梅原猛名誉村長新春特別講演会

とき 平成9年1月26日(日)

ところ 碧南市文化会館

入場料 無料(要整理券)

●茶の湯文化講座

とき 平成9年2月2日(日)

ところ 哲学たいけん村無我苑研修道

場和室

講師 倉沢行洋氏(神戸大学教授)

詳細については、瞑想回廊事務局(☎41・8522)へ。

エンカウンター・グループ

へのお誘い

エンカウンター・グループということばを、これまでどこかで聞いたことがあるでしょうか。日本ではエンカウンター・グループが行なわれるようになってもうかれこれ二十年近くになり、このことばを書名にした本もすでに幾冊か出ています。そういうわけで、臨床心理学とか心理療法やカウンセリングなどにかかわっている人たちの間ではある程度は知

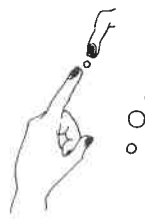
られているのですが、でも新聞やテレビで取り上げられるということもありませんし、一般には、まだまだ耳慣れないことばだろうと思います。

エンカウンターということばは英語です。大分前のスピルバーグ監督の作品で『未知との遭遇』という映画があったのを覚えているでしょうか。前半世界の各地で多くの人が UFO を目撃するなど、いろいろな事件が起こります。そしてその UFO が伝えてきたメッセージが解読され、アメリカのある地点で宇宙人と地球人類（アメリカ政府代表など）との最初の直接の接触が実現します。着陸した UFO の巨大な壁が開いて、まばゆい光のなかに宇宙人たちの姿が浮かび上がり、地上に降り立つところがこの映画のクライマックスでした。この映画の原題、（Close Encounter of the Third Kind）は、実はエンカウンターということばが使われているのです。「偶然の予期しない出会い、遭遇」、たぶん辞書を引くとそんな訳がでていると思います。地球外生命体との直接的出会いを、この映画の原題は意味するようです。

エンカウンター・グループがまず目指すものも、地球外生命体とはありませんが、人と人とのこの直接的な出会いです。ひとりの人間がひとりの人間と真に出会うということも、考えてみると恒星間あるいは宇宙空間の距離を越えての生命体の出会い同様、きわめて稀で困難なことだといえるでしょう。人と人との間には、魂を凍らせるような距離が広がっ

ているのではないのでしょうか。どのようにしてぼくらはその距離を越えて、間違いない相手のもとへ到達できるのでしょうか。ぼくらのことばも、ちよūd あの人類のメッセージを携えて冥王星の外、外惑星空間へと旅立って行ったヴォイジャー II 号のように、沈黙する空間のなかに打ち出されて行くだけなのではないでしょうか。孤独の中から誰かに受け止められることを希って…。

ぼくらは円形に座り、そしてグループは開始されます。ぼくらがそこで経験できるものは何でしょうか。はたしてそこで何かが始まり、何かが経験されると言えるのでしょうか。沈黙そして無、不安、困惑や焦燥、不信と絶望、憎しみと怒り、そして希望と愛と創造の瞬間。ぼくらがそこで経験するのは要するに生の原形です。



前述したのは平成元年冬、中津川研修センターでエンカウンター・グループを開催するにあたり、その参加を呼び掛けた広報文である。こうしたセッションを無我苑でもできないか、と木村易先生（愛知大学）に相談したところ、幸いにもご承諾いただけた。

事業は以下のとおり予定されている。

日時：平成 9 年 2 月 28 日（金）～ 3 月 2 日（日）

（2泊3日）

会場：碧南市哲学たいけん村無我苑

研修道場

（宿泊地 勤労青少年水上スポーツセンター）

参加費・・・20,000円（宿泊費、食費

茶菓代を含む）

募集人数・・・20名

申込み・・・平成 8 年 1 月 21 日（火） 午前 9 時

から参加費 20,000円を添えて、無我苑まで申し込み。

（先着順）

エンカウンター・グループは「出会いグループ」。いわゆる心理学の勉強会ではない。初めて会った人と人が「なんでもあり」の気楽さでざっくばらんに語り合う、ただそれだけに実に不思議な、自由な体験ができる（期待されすぎても困るが）。あなたのご参加を心からお待ちしています。

“Bon voyage”

（素敵な 旅行を！）

来村者の声

◎本物のソクラテスに会いたいです。

（西尾市 歯科衛生士）

◎現在の自分ともう一人の自分を見つめ直すことができ、とてもすばらしい時間が持てました。もう一人の自分とは、現在の自分を無にした姿、のことです。

（名古屋市 主婦）

◎竹林で囲まれているのが、閉鎖的で特

別な場所に来た気持ちになった。
（市外 大学生）

◎毎週末たくなるような所です。
（西春町 公務員）

◎静寂の思いに浸ることが出来ました。日々を多用に過ごす者のひとときの安らぎを知る絶好の場と考えます。折りに触れ、訪ねたい場所の一つです。
（半田市 無職）

◎普通の美術館や博物館とは違うコンセプト、その志の高さを感じました。
（四日市市 公務員）

◎建築という観点からして、とても楽しい建物。
（豊橋市 事務職）

